

「松山俘虜収容所」に來たドイツ人兵士たち（一）

森 孝明

序 ロシア人墓地に眠るドイツ人兵士の墓

松山市の中央にある松山城からほぼ真北に向かうと、山越の山すそに通称「ロシア人墓地」がある。この墓地は、日露戦争中に俘虜^①として松山に送られて來た、延べ六〇〇〇人を超えるロシア兵のうち、帰国を待たずに亡くなった九八名が眠っている元陸軍墓地である。日露戦争は、一九〇四（明治三七）年二月十日ロシアに対する日本の宣戦布告に始まり、翌年九月五日に開かれたポーツマス会議での日露講和条約締結に終わる、一年七ヶ月の戦争だった。その間、約七万九千人のロシア人將兵が俘虜となり、全国二九箇所の収容所に送られたが、最も早く開設された収容所が松山であった。そして松山の特色の一つは、將校と傷病兵を主に受け入れたことにあり、収容所で亡くなる兵士の数が最も多いのも松山だったのである。^②

松山が日本で最初にしかも傷病兵を受け入れることになったのは、開戦からわずか十九日後の二月二九日、日本赤十字社長から愛媛支部長へ電報による露国負傷兵士の収容救護の打診があり、三月一九日に日本赤十字社病院船「博愛丸」が松山に到着して、負傷したロシア兵三名が三津浜港から上陸したことに始まる。^③松山収容所には、以後百回

を超える俘虜輸送船によって、延べ人数六〇一九人の俘虜が送られてきた⁽⁴⁾。そして最後のロシア兵俘虜六〇名が高浜港から出発したのは、一九〇六（明治三九）年二月一六日。それから四日後に松山収容所は閉鎖された⁽⁵⁾。

松山が俘虜収容所の適所と認められたのは、島であること、気候温暖なこと、大陸に近く輸送に便利なこと、歩兵第二十二連隊の所在地であることなどが考えられるが⁽⁶⁾、ロシア兵収容所が初めてのことはなかった。その一〇年前の一八九四（明治二七）年に起こった日清戦争の時にも、九七名の清国俘虜が同じ山越の長建寺に収容されていた⁽⁷⁾。すでに歴史があつたのである。

「ロシア人墓地」は、収容所開設から二ヶ月後の五月に、陸軍省が俘虜死亡に備えて、温泉郡御幸村千秋寺墓地に隣接する旧妙見堂跡地百三十坪ほどの墓地を買い上げたものである⁽⁸⁾。しかしながら、この墓地は妙見山（通称弁天山）の小高い丘の上にあつて、後に一部が崩れ始めたため、一九五九（昭和三四）年十二月に当時の所管大蔵省管財局から松山市に譲与され、維持管理を任された。そのため市はこの山の南西の麓にある来迎寺境内の二百一坪を買収し、翌年に墓地をそっくりここに移転した⁽⁹⁾。これが現在の「ロシア人墓地」である。九八基の墓石は移転前と同様に北の祖国を向いて整然と並び、墓石には埋葬されている兵士の氏名と階級と死亡年月日が刻まれている⁽¹⁰⁾。今では地元の中学生やボランティアによつて墓地がきれいに清掃され、一九六五（昭和四〇）年からは毎年三月に慰霊祭が続けられている⁽¹¹⁾。さて、この「ロシア人墓地」の入り口階段を上がつて、右側に並ぶ墓石の間を進んでいくと、突き当たりの右側にやや大きい墓石が一基眼に入る。墓石の表には、横文字とカタカナで「ARTHUR LAUENSTEIN アルトゥール ウエンスタイン」と刻まれ、その下に「* 17. SEPT. 1888 + 6 NOV. 1916」と記されている。そして裏面には日本語で「独逸海兵之墓」と縦書きされている。この墓の主は、ドイツ海軍兵士、名前はドイツ語読みするとアルトゥール・ラウエンシュタイン、生年一八八八年九月一七日、没年一九一六年十一月六日と読むことができる。一九一六年

は、ロシア兵俘虜が松山から姿を消し、松山収容所が閉鎖されてから丁度一〇年後の大正五年である。没年からして、ドイツ兵は妙見山の旧墓地に埋葬され、一九六〇年の墓地移転時にロシア兵の墓と一緒にここに移されたのであろう。このドイツ人は日露戦争に関係したはずはなく、一市民として死んだわけでもない。肩書きが物語るように、ドイツ海軍兵士として死亡し、陸軍墓地に埋葬されたのである。二八歳で生涯を終えたこの青年は、今から九四年前に松山にいたことになる。「ロシア人墓地」の名に隠れて一人ひっそりと眠っているが、そのとき松山にいたドイツ人は彼一人ではなかった。

四一五人のドイツ人兵士たちが松山にいたのである。なぜそんなに多くのドイツ人が松山にいたのか。それは、日本を遠く離れたヨーロッパで起こったサラエヴォ事件に端を発する。

一九一四（大正三）年六月二八日にオーストリア¹³ハンガリー帝国王位継承者フランツ・フェルディナント大公夫妻がサラエヴォ（現ボスニア・ヘルツェゴビナ領）を視察中、セルビア人の青年に暗殺された。この事件をきっかけにオーストリアがセルビアに宣戦布告し、第一次世界大戦が勃発した。それに連動して、一九世紀末来ドイツと海上の覇権を争っていたイギリスが、一九〇二年に結んだ日英同盟を頼りに、シナ海で活動するドイツ仮装巡洋艦の日本海軍による搜索・撃退という限定的な支援要請をしてきた。日本は英国の依頼にこと寄せて連合国の一員として参戦し、ドイツが權益を持つ中国山東省の租借地青島を攻略したのである。この青島における日独戦争は、日本がドイツに対して宣戦布告した一九一四年八月二三日からドイツ軍が降伏した十一月七日まで、わずか七七日間の短い期間で



アルトゥール・ラウエンシュタインの墓

あつた。青島攻略に従軍した日本陸軍兵士の総数は実に五万一千八百二名に及んだが、一方ドイツ軍の総勢はわずかに五千余名と考えられている。しかもそのすべてが現役兵ではなく、日独戦争に際して東アジア一帯に発布された動員令に集まつた応召兵が二千名近くおり、彼らは大学教師から商社・銀行・郵便局員、商人、職人等職種は様々で、日本から応召した一一八名も含まれていた。⁽¹⁵⁾この日独兵力の差が示すごとく、日本の圧倒的な勝利の結果、俘虜となつたドイツの将兵四七一五名がただちに日本へ船で輸送された。⁽¹⁶⁾こうして再び松山收容所が開設され、今度はドイツ人たちがやつて来ることになつたのである。

第一章 松山俘虜收容所

第一節 青島から松山へ

大正三年十一月八日、この日「陸軍省公表」が次のように出された。

我全権委員陸軍少将山梨半造並海軍少佐高橋壽太郎ハ敵ノ全権委員「ザツクセル」大佐トノ間二十一月七日午後七時五〇分ヲ以テ開城規約ヲ締結シ敵ハ全部我要求ヲ容レタリ⁽¹⁶⁾

日本とドイツの短い戦いは、十一月七日夕刻に終わった。日本軍の勝利である。「青島の防備は要塞というべからず単に防備地帯に過ぎざりしなり。されば実勢力においても僅かに三千人の兵士を有せしのみ、この寡兵をもつて貴国を敵に相戦わんとは、予等の毫も予期せざりしところなり。(…)

実に我が祖国は貴国と開戦するの意なかりし

なり。(…)もしも英仏露軍が来たりて青島を攻撃したりと仮定せば、それを散々に撃破して長く守備の任を保持し得べかりしに、勇敢なる日本軍なれば斯くも脆くも打落されたり」と嘆いた青島総督ヴァルデック (Alfred Meyer-Waldeck) 少将と日本軍司令官神尾中将の会見は十日に行われた。開城規約に基づく主要な人馬物件の授受を結了した十四日、総督以下十三名の幕僚は俘虜として沙子口から薩摩丸に乗船、その夜八時日本へ出発し、十七日朝九時二〇分門司港に到着したのである。四七〇〇名のドイツ兵たちはすでに十二日から日本に向けて輸送が始まっていた。⁽¹⁸⁾松山に送られるドイツ兵はヴァルデック総督と同じ薩摩丸に乗っており、十八日早朝に高浜港に到着するのである。

第二節 収容所の開設

青島で全権委員の会見が行われた日の翌日十一月十一日、日本では早くも俘虜収容地が久留米を筆頭に、「東京、名古屋、福岡、松山、丸亀、姫路、大阪、熊本」⁽¹⁹⁾と決定され、各収容所長が一斉に発令された。松山収容所長は歩兵第二十二連隊附陸軍歩兵中佐前川讓吉であった。⁽²⁰⁾同日松山収容所職員に任命された者は、白石昌壽大尉、本宮隆市中尉、柿澤雅一軍医(兼務)、林庄次郎主計(兼務)、神笠作一計手、勝静夫通訳の六名で、書記高田久吉軍曹、書記五百木利右衛門軍曹、前田孫史郎看護長の三名は四日後の十五日に任命された。⁽²¹⁾

前川中佐は十一日には広島第五師団機動演習地に出張しており、その日の夜半に松山収容所開設に関する命令を受領したが、生憎病氣のため、帰松は十三日になった。⁽²²⁾しかし翌十二日には、第五師団経理部小田一等主計が二名の技手を従えて松山へ行き、午前中に留守隊長安井大尉と松山市役所兵事課書記岡山・宮内二名と共に俘虜収容家屋の視察を行っている。その結果収容場所と人員を選定し、松山市公会堂、大林寺、山越の不退寺、長建寺、来迎寺、淨

福寺（法華寺は不合格）、及び来迎寺に収容することを決め、それぞれ賃貸料を協定して借り入れの契約をし、また便所、風呂場等特別の施設を要するものはさまざま工事の着手を手配した。⁽²⁴⁾「松山俘虜収容所」が作成した『日誌』⁽²⁵⁾の第一日目に次のように記されている。

十一月十三日金曜日晴天 収容所本部開設

- 一、本日松山俘虜収容所事務所ヲ歩兵第二十二連隊連隊本部内ニ開設ス⁽²⁶⁾
- 二、所長及所員ハ師団司令部附小田主計ト共ニ山越、大林寺及公会堂ニ於ケル収容場ヲ巡視シ衛兵場、歩哨ノ位置其他ノ警戒法、室ノ配当、電灯設備等ニ対スル計画ヲナス

その同じ日、『海南新聞』は「捕虜は十六日頃に来る」と報じたが、二日後には「松山に収容さるべき俘虜四一五名は十七日朝弘済丸にて高浜に来着の筈」と、人数は正しいものの日にちと船名を誤報し、十六日にやつと正確な情報を報道することができた。収容所設置の慌ただしさと俘虜到着情報の混乱は、しかし松山だけではなかったであろう。この日陸軍通訳官勝勝夫がやつと松山に着任したのである。そして一七日の午前中に収容準備が完了し、午後は所長が高浜に出張して俘虜受領手続き等を手配し、夜には所員等が更に高浜へ行き、俘虜の集合場の設備から湯茶の準備まで作業を行った。⁽²⁷⁾ドイツ兵俘虜の第一陣三一六名が到着する前夜のことである。

第三節 俘虜の到着

収容所開設決定後新聞が俘虜来松のニュースを何度も報じた結果、松山市民は、

独兵俘虜を見んものと十八日は日の光が東の空にほの見える頃より既に高浜に押寄せた群衆は少なからざりしが、薩摩丸の到着予定時刻たる七時には早くも駅前より郵便局角に至る街路は人を以て埋められ、その数四五千の多数に上った。（『海南新聞』大正三年十一月十九日）

「見物人の黒山」が待つ間程なく、午前七時三〇分薩摩丸が入港してきた。甲板には俘虜たちが「黒山のように充満して」いる。前川所長一行がまず薩摩丸に乗り込んで授受の打ち合わせをした後、八時に上陸を開始した。『海南新聞』はこの「高浜上陸の光景」を当時にはめずらしい大きな写真で報道し、且つその説明を次のようにつけている。

今し第一軍用舢舨が高浜に着し四〇名の乗員中下士以下が先ず上陸を開始し、将校一〇名が船中に残れる光景にして、荷物を携えたるは下士卒。外套を着し又は帯剣せる者にして荷物を携えざるが将校、船尾の我が衛兵の左に立ち煙草をくゆらし耳被を為せるが独逸陸軍少佐クレマンなり（同）

新聞記者の目に将校の姿は、

日露戦争当時の露国俘虜も将校だけは流石に将校なりと首肯せしめたが、独逸の将校も又流石に将校は将校だけで、薄茶又は薄鼠色の上等羅紗で作った立派な軍服を着し、その上へ同じ地質色合の将校マント或いは外套を被り手に剣を按して無言何事も語らない処、流石に独逸の将校たるに恥じない（同）

と写り、また携帯品についても、

将校の携帯品は例の独逸製の立派な赤皮の大カバンに入れたのが二〇個近くもある上に種々な行李様のもの及び毛布巻等も沢山あった。下士以下は多くは白色毛布及びザック製の囊又はカバンを持ち、腰には水筒、雑囊、茶瓶、水呑等をブラ提げ、いずれも黒色の外套を着していた(同)

と細かい観察である。

一時間後の九時に将校一〇名と准士官以下三〇六名全員が上陸した後、輸送指揮官村上中尉より前川収容所長は正式にドイツ俘虜三一六名を受領し、午後零時十五分、前川所長が訓示を勝通訳官の通訳で行った後、高浜を出発した⁽²⁸⁾。全員徒歩の予定だったが、「三一六名中鉄条網や鹿柴その他で負傷している者は六、七名にすぎず、その内三名は歩行に困難に感ずるとの申し出により汽車にて輸送することになったが、その他は何れも健康体で皆元気旺盛、マルデ日本観光団員といったような顔付き」で松山へ向かった⁽²⁹⁾。また、クレーマン少佐の申し出により、前川所長は将校達も松山の古町まで乗車させた⁽³⁰⁾。こうして俘虜たちは樋口中尉と草薙少尉の指揮する衛兵六〇余名に護送され、沿道の要所には、松山、三津浜共に見物人が群れをなし、容易に歩ききれないありさまであったが、予定の順路を経て、午後三時松山に着いた。そして将校一〇名は山越の来迎寺に、下士以下三〇六名は山越とそこから約三キロ離れた公会堂に分けて収容された。入舎終了は四時であった。

新聞の報道によれば、「俘虜の収容が終わるや、前川所長は直ちに入浴を許可」した。将校は「洋風の独り湯」であっ

たが、その他は「青島に籠城し（…）いやが上にも汚れ果て殆どこの世の人とも覚えぬ有様なりければ、その悦びは例せんにもなく、而も新調の新槽とてその気持ちの良さ更に一入と見え」、「混浴をも厭はばこそ頭からザブリザブリと打ち洗いつつ興じ歡ぶ様は実にいじらしかりし」と。この日十八日の『日誌』の最後には、「入舎後所長、所員各収容所ヲ巡視シタルニ静肅ニシテ、整頓各整ヒ、満足ノ模様ナリ」と記してある。

二日後の十一月二十日、午前六時五〇分、松山収容所へ送られるドイツ兵俘虜の第二回輸送船大東丸が高浜に入港し、薩摩丸と同様に、南北両棧橋の中間、岸より約二丁の海上に投錨した。大東丸は將校二七名と准士官以下五三九名の俘虜を乗せ、十六日午後一〇時に沙子口より出發、十九日午前に門司外六連島に着き、檢疫を受け、午後三時に松山へ向かったのである。これを迎える収容所長前川中佐は、白石大尉、柿澤二等軍医その他の所員及び日本語の上手な通訳俘虜マイスナーを連れて、伊予鉄松山駅午前六時二〇分發の一番列車に乗り込んで高浜に着いた。大東丸の船中において、將校は一等食堂で洋食の朝食を取り、下士卒は甲板上でパンと缶詰牛肉の朝食を取った後、大阪へ行く俘虜たちとの別れが交わされ、大東丸は午前一〇時大阪へ出發した。^①

松山で下船する俘虜は、將校五名と下士以下九四名の九九名である。一回目と同じ手順で八時三〇分に上陸開始、九時完了とともに俘虜受領を終えた。『海南新聞』は、「この度は海軍兵が主」との見出しを付け、次のように報じている。

第一回入松の俘虜中には一人の海軍兵もあらざりしが、今回の分の准士官以下は過半水兵にして黒色の海軍服を着しおれり。携帯荷物その他前回の分と変わる所なく、何れもコザツパリとしたる服裝にて異臭等を覚えず。

（『海南新聞』大正三年十一月二十一日）

「高浜の群衆は第一回の約半数なりしが、三津方面は相変わらず多く、松山は前回に数倍せる人出にて、萱町筋の如き堵を為してこの珍客を迎え」た。⁽³²⁾ 万一を考えて松山憲兵分隊曹長以下数名の憲兵上等兵や三津警察署長以下数名の巡査が出張し、また歩兵第二十二連隊より派遣の山本少尉引率の軍曹以下約三〇名に護衛されて、俘虜は何事もなく午後二時四五分に入舎を終了した。「入舎後ノ景況概シテ静肅ニシテ異情ナシ」(『日誌』大正三年十一月二十一日)。

将校十五名、内少佐一名、大尉一名、中尉四名、少尉九名

准士官・同相当文武官五五名

下士・同相当文武官五九名

兵卒・同相当者二八六名

合計四一五名

である。⁽³³⁾ 俘虜を収容するに祭しては、「取締及内務ノ便宜ヲ計り成ルベク建制中隊毎ニ」各分置場に区分し、各分置場においては「室ノ広狭ニ応ジ人員ヲ配当収容」した結果次の通りであった。

公会堂 海軍歩兵第三大隊第六中隊 准士官以下一八〇名

大林寺 砲兵中隊

同 八〇名

山越(弘願寺、長建寺、不退寺、浄福寺)

海軍歩兵第三大隊第五中隊工兵中隊 同一三一名

山越(来迎寺)

将校

十五名

外ニ從卒八名　コック一名⁽³⁴⁾

こうして、海兵第三大隊騎兵中隊長クレーマン少佐を筆頭に、ドイツ兵俘虜四一五名の二年五ヶ月に及ぶ松山での収容所生活が始まった。

第二章　収容所の生活

第一節　俘虜に関する法規制定と俘虜の取扱

松山へやって来たドイツ人兵士たちは、俘虜としてどのような取扱を受けたのであろうか。日本国が全く独自の取扱方を定めて、陸軍が全く独自に取り締まったわけではない。日本は一八九九（明治三二）年にオランダのハーグで開かれた万国平和会議の最終議定書に調印し、いわゆるハーグ条約に基づいて俘虜を人道的に取り扱うことを公約していた。日本は日露戦争におけるロシア兵俘虜に対しては、この国際条約上の義務以上の扱いをしたと言われるが、それから一〇年後にやって来たドイツ兵俘虜に対しても、日本はハーグ条約（但し日露戦争の二年後の一九〇七（明治四〇）年に再びハーグで開かれた「第二回万国平和会議」において日本をはじめ四四カ国が調印した「第二ハーグ条約」）を遵守する取扱を示した。防衛省防衛研究所図書館所蔵の図書『大正三年乃至九年戦役俘虜二関スル書類（陸軍省）』に収められている報告『大正三年乃至九年戦役俘虜取扱顛末』（大正九年七月十五日陸軍大臣宛俘虜情報局長官）（以下『取扱顛末』と略記）の「緒言」に、俘虜取扱規則について次のように記述してある。

国際法規ニ基キ戦場ニ於テ帝国陸海軍ノ正常ニ捕獲シタル俘虜ノ待遇ニ付テハ、文明国間ニ存立シ来リタル国際「松山俘虜収容所」に來たドイツ人兵士たち（一）

慣例並二千九百七年十月十八日海芽府（ハーグ・筆者注）ニ於テ締結シタル陸戰ノ法規慣例ニ関スル條約⁸⁶ニ遵拠シ、大正三年九月二十一日陸軍省達第三十一号及海軍省達第四百十三号ヲ以テ陸軍及海軍ニ於ケル俘虜取扱規則ヲ制定シ、青島ニ於ケル作戰ノ進捗ニ伴ヒ敵国俘虜ヲ内地ニ收容スルニ當リテハ俘虜收容所ニ於ケル取締上ノ必要ニ基キ同年九月二十一日俘虜取扱細則を制定シ、ソノ後必要ニ応シテ俘虜勞役規則、俘虜処罰法等ヲ制定セリ（傍線引用者）

続けて、俘虜の取扱については、

俘虜取扱ニ関スル陸海軍ノ法規ハ、出征部隊及内地軍衛ニ於テ最モ確實ニ遵守セラレ、総テ俘虜ハ博愛ノ心ヲ以テソノ取扱ヲ為シ、戰地ト内地トヲ問ハス決シテ侮辱虐待ヲ之ニ加フルコトヲ許サス、ソノ身分階級ニ応シテ相當ノ待遇ヲ与ヘ、帝國陸海軍ニ於ケル現行法規ニ依リ、必要ノ取締ヲ為スノ外ハ毫モソノ身体ヲ拘束セス、軍紀風紀ニ反セサル限りハ信教ノ自由ヲ与ヘ、戰地ヨリ後送ニ係ハルモノハソノ名譽健康ヲ保持スルニ適當ナル陸軍建築物、寺院ソノ他ノ家屋ニ收容シ、就中將校ニハ從卒ヲ附シテ下士卒トソノ居室ヲ區別シ、一般ニソノ衛生ニ多大ノ注意ヲ加ヘ、傷者及病者ハ陸海軍病院若クハ俘虜收容所付屬病室ニ於テ帝國軍人ノ病傷者ト同シク鄭重ニ待遇シ之ト同一ノ治療ヲ加ヘ、特ニ俘虜ノ給養ニ関シテハ内國人ト食物ノ異ナル所アルヲ顧慮シ、帝國軍人ニ比スレハ稍多額ノ費用ヲ支出シ・・・（傍線引用者）

と記述し、「第二ハーグ條約」を遵守し、俘虜を人道的に扱ったことを明記している。この『取扱顛末』報告書を

作成した「俘虜情報局」自体が、ハーグ条約に従って設置されたものである⁽²⁷⁾。

「松山俘虜收容所」は開設翌日十四日から四日間、「收容所規定の作製に従事」し、

俘虜取扱規則、同細則、松山俘虜收容所服務取締規則、明治三十七八年戰役俘虜取扱顛末等ヲ参照シ收容所ニ要スル諸規定ヲ定ム。其ノ主要ナルモノハ松山俘虜收容所服務細則、松山俘虜收容所俘虜心得、週間勤務割表、日課時限表、松山俘虜收容所衛兵ニ関スル規定、同歩哨特別守則トス

と『業務報告書』の「第一章 開設」に明記してある。引用冒頭の「俘虜取扱規則、同細則」は制定年等記されていないが、これは先の『取扱顛末』に記された、ハーグ条約に「遵拠」して日本陸海軍によって大正三年九月二十一日に制定された「俘虜取扱規則」と「俘虜取扱細則」であろう。「松山俘虜收容所」はこれに基づき、更に加えて、明治三十七、八年の口

「松山俘虜收容所」に來たドイツ人兵士たち (一)



松山市公会堂のドイツ兵たち (ファン・デア・ラーン氏提供)

シア兵俘虜に関する俘虜取扱顚末も参照し、收容所の諸規定を作製したのである。

第二節 生活環境

「松山俘虜收容所」は、陸海軍の定めた「俘虜取扱規則」の第二〇条「俘虜收容所ハ俘虜ノ名誉健康ヲ害セス且其ノ逃走ヲ防止スルニ足ルヘキ陸軍建築物又ハ寺院其ノ他ノ家屋ヲ以テ之ニ充当スヘシ」に従つて、市内の三箇所を收容所に選定した。⁽⁴⁰⁾即ち松山城の南西にあった松山市公会堂、そこから一キロ程北にある大林寺、更にそこから北東に三キロ程離れた山越の五寺（田の字形に隣接した寺、弘願寺・長建寺・浄福寺・不退寺及び道路を隔てた来迎寺）であつた。この三箇所は全て一〇年前にロシア兵俘虜收容所として使用された建物である。公会堂は現在の萱町一丁目⁽⁴¹⁾に一八九一年に建てられた二階建ての建築で、日本庭園に池もあり、県会や市会にも利用されたが、一九二八年に解体された。⁽⁴²⁾当時市内一大きかつた建物は二七三坪余りあり、ここに一八〇名が收容された。具体的に見ると、まず二階は板囲いにして廊下を造り、障子を入れ三室に分け、各室に三十九名を收容。階下は四室に分けて、十一名を二部屋、二十二名を二部屋、その他に診断所及び面会所、監視将校室、下土室等に分けた。各室とも畳敷きにしたので、俘虜たちは毛布を六枚折りにしてこれに腰をかけたり、畳の上に寝転びなどし、膝を組む者はない様子であつた。⁽⁴³⁾大林寺は松山城主久松家菩提寺で、ロシア兵俘虜がいた頃は、敷地内に本堂、庫裏の外、西山を借景にした池や、十三ものお堂があつたが、戦災等のため当時の面影を残すものは少ない。⁽⁴⁴⁾この大林寺には八〇名が收容された。山越の五寺は現在も当時の場所にあるものの、かなり新しく建て換えられている。弘願寺・長建寺・浄福寺・不退寺に合わせ、一三一名、来迎寺には将校一五名と従卒八名にコック一名（自炊開始後）が收容された。来迎寺の住職吉川昌堂氏の説明によると、本堂を三室に分け、東の一室を従卒八名の居間とし、西の一間を将校十五人の寝室に充て、中央の

一室を談話室にした。庫裡の方の一部分は監視将校事務室と来賓室とに借り上げられ、境内には将校浴室一棟、山越下士卒浴場一棟及び山越連合炊事場一棟とが新築された。⁽⁴⁴⁾

収容当初、将校は一人の専有面積概ね四畳で、広さは適当とみなされたが、准士官以下は一人二畳を標準にしたものの、しかし、「各自の寝台、支給品、私物等のために減殺されて狭隘を感じる所あり」という有様であった。部屋の面積の問題だけでなく、建物が「公会堂を除き、全部寺院にして、しかも建築は概して古く、あるいは一部腐朽し、あるいは破損し、また公会堂は階上収容により、若干傾斜の危険を生じていた」。また、「通気、採光、保温等不備の点が多く、逐次改築、修理、増築等を行い、ようやく整備の域に達したが、しかし、修理すれば破損するなど、全くその煩わしさにたえないものがあつた」。その上、収容所は三カ所に分散した分置場で、しかも山越は五寺という形態は、「収容取締に不便を感じ、多数の衛兵を要し」、「収容業務執行上その進捗を妨害することが多」かつた。⁽⁴⁵⁾このよう

な『業務報告書』の記述を見る限り、「松山収容所」が収容所として問題を抱えた出発をしており、俘虜に不満が生じたと思われる。俘虜たちはこの収容所をどう見ていたのであろうか。

全国に開設されたドイツ兵俘虜収容所について、第三者的に調査された「報告書」が二件残されている。一件は、東京ジーマンス・シュツケルト電気株式会社支配人N. ドレンクハーンの手による報告書である。在日ドイツ人のド



松山市公会堂（鳴門市ドイツ館所蔵）

レンクハーンは全国の収容所への金品等援助をし、日本国内から俘虜たちを支援する有力な人物として、「収容所長と個人的に交渉することによって俘虜の願望及びドイツ救恤金のもっとも適切な使い方について調査するため」⁽⁶⁾、陸軍省俘虜情報局了解のもと、一九一五（大正四）年四月頃から全国十二箇所を視察し、十一月に報告書をドイツ本国へ送った。俘虜ではない在日ドイツ人の目で見た収容所開設後半年ないし一年頃の収容所の状態の報告ではあるが、「文通で私の知っている将校や多くの予備役の人たち」からの話をもとにして、状況を三グループにランク付けしている。この報告書によると、松山は静岡、丸亀、久留米と並んで、「住居事情」が「もつとも悪い」評価を下されている。その理由の一つは、「多くの収容所は狭すぎ、一人当たり二平方米に過ぎ」ないことで、半数の東京、静岡、丸亀、久留米、熊本、松山が該当する。また、東京、丸亀、松山は、「夏多くの寺院は暗く湿気在り、しばしばネズミと蚤にくるしめられる」所とされている。これについては、松山収容所の『業務報告書』に、「床ハ一般ニ畳敷ナリシカ、彼等ノ習慣トシテ常ニ上靴ニテ出入スル為破損シ易ク從テ塵芥ヲ発散シ又夏季蚤族発生シ易キ等ノ諸点ヲ顧慮シ、大正五年七月某筋ニ申請シ畳ヲ去リ全部板敷トナセリ」と記しているから、収容所も環境の悪さを少しは改善したと思われる。他方、「将校の生活事情」は、「一般に各二、四名が共同の一室を持っている」のに比べ、「松山では将校十五名が、カーテンとマットで細分された大部屋を七名の従卒と共に持っている。従って絶えず相互に妨害し合っている」とある。また「スポーツと運動」と「散歩」の項目については、理由が不明だが、松山は久留



松山収容所（鳴門市ドイツ館所蔵）

米と並んで最低の「グループⅢ」の評価である。最後の項目「一般的な雰囲気」では、「個々の収容所に対し、宿舍、生活事情、一般的な快適度という点から」、松山は十二箇所中十一番目の「グループⅢ」に入れられている。⁽⁴⁸⁾

二件目の報告書は、在日アメリカ大使館書記官サムナー・ウエルズが、ドイツ政府の要請を受けたアメリカ政府の指示に従って、一九一六年三月に全国十一収容所⁽⁴⁹⁾を視察調査をしたものである。ドレンクハーン報告書からは一年経った時点での、言わば公的報告書である。この報告書は各収容所毎にまとめられており、松山については、

ここの大きな困難は、若干の他の収容所と同じように、建物がその性格上俘虜たちの収容に不適でして、境内の広さが非常に限定されていますので、居住と睡眠のためには不十分な場所しかなく、屋外に留まるための区域も更に僅かしから自由に使えない点にあります。このことを別にすれば収容所管理部は、収容所生活の厳しさを和らげ、俘虜たちに気晴らしを与えてやるために、精一杯の事を行ってきまし⁽⁵⁰⁾た。

と報告しており、また、「私は多数の俘虜と話しましたが、彼らの不平は何もかも彼らの宿舍の狭さ、家屋内のすきま風、寝室と便所の近さ等と関係していました。(……)入浴と衛生の設備は良好ではなく、収容所の堀内の極めて限定された場所にあるこれらの設備を改善するのは、かの地で慣例のシステムでは不可能でしょう」と述べている。風呂と便所については、収容所当局が収容所の選定と同時に各分置場に新しいものを設置したにもかかわらず、特に当時の日本式便所は不評であったであろう。

さて、両報告書の中で大きく評価が異なっているのは、収容所当局と俘虜、特に将校との関係の見方である。ドレンクハーン報告書では、「将校の生活事情」について、先に見たように、まるで将校たちを大部屋に押し込んで不当

な扱いをしているように捉えており、「日本側当局と俘虜の間の関係」については、「松山では当局は当初から今日に至るまで厳格、非友好的かつ拒否的である」と断じている。これに対して、サムナー・ウェルズの報告書では、「事実、収容所長と俘虜ノ兵員たちとの関係も特に良好なように思われました。彼は最古参の下士官達には個室を与えさせており、彼らに多数の便宜を認めてやっています」と述べ、一方、将校達については次のように書いている。

俘虜のドイツ人将校達の状況は兵員達の状況とは全く異なっています。彼らの内の誰も俘虜収容条件に満足していません。既に挙げましたように、彼らは、兵員達も居住している一つの寺院の境内の一部に収容されていますが、彼らの居室は兵員達の居室から完全に分けられています。将校達は大きな庭を一つ、テニスコート二面、避暑用の家屋一軒、並びに丘の斜面にある場所を彼らの専用に持っています。その上彼らは田舎へ散歩に行く許可を時折得ます。大きな居室一つ、特別な複数の調理場、風呂場等が自由に使え、自分達の従卒を有していて、彼らが給仕してくれます。十五名全員が暫くの間、かなり小さな寝室を共同で使用するよう強いられていた限りでは、不愉快な目に合わなければなりませんでした。しかしこの不便な状況は私の到着前に解消されていた結果、今では数名の将校は個室を持っています。

更に、サムナー・ウェルズの報告書は、「将校達の階級に応じて彼らには多くの特権が認められていて、彼らは、自分達の扱われ方に全く満足していると説明した多数の他の収容所の将校達よりも遥かに多くの特権を有しています」と述べ、その前文において、最古参の「クレイメン少佐のリストに挙げられている苦情が正当なものであるとか、私が収容所で見たことによって、何らかの言うに足る方法で裏付けられるとは認識できません」とはつきり否定してい

る。他の收容所についての報告と比べても、松山收容所の将校達に関する報告が多いように思われる。松山の将校達の正当でない不満あるいはわがままな苦情に対してのサムナー・ウエルズの言葉のようにも思われる。ドレンクハーン報告書が俘虜の立場に立った報告書であることは否定できないことかもしれない。收容所としても工夫はしたようで、「各分置場取締高級准士官」（一名の古参准士官に俘虜ノ勤務として取締に着かせた）や「日語通」（日本語のできる俘虜を選び各分置場に配置し、通訳の補助をさせた者）には幾分優遇して、後には高級准士官には一室、日語通には二人乃至五人に一室を与えた⁽¹⁹⁾。

いずれにせよ、しかし、松山收容所が「古キ寺院内ノ收容ハ概シテ採光不良ニシテ陰鬱ナルノミナラス、墓地多ク散歩場狭クシテ、自然ニ精神ヲ沈鬱ナラシメ神經衰弱ノ因トナリ易⁽²⁰⁾」い環境であることは、誰の目にも明らかであった。このような狭く陰鬱な環境に対する対策を考えなくてはならない。これにいち早く動いたのは、俘虜たちの指揮官クレーマン少佐であった。收容所生活が始まった五日後の十一月二十五日の『海南新聞』に、将校たちのいた来迎寺住職の談として、先日クレーマン少佐が家屋を新築するから裏山を貸してほしいと申し出があり、許可さえあれば喜んで土地は無論無償提供すると答えた、とある。許可がいつおりたかは不明であるが、この家屋新築は実行された。そしておそらくこれをきっかけに各分置場に家屋が造られたのであろう。『業務報告書』には、「俘虜中有資格者ハ構内許可セラレタル位置ニ於テ樹陰ニ或ハ池畔等ニ自費小屋ヲ構フルモノ多シ。冬、夏季ニヨリ通氣、保温、日光、空氣等ヲ顧慮シ頗ル具合善ク造リアリ。日中班内ノ喧噪ヲ避ケ、閑静ニ身ヲ処シ或ハ讀書シ或ハ二、三親友ノ会食遊技ヲナスニ適当ナルヲ以テ彼等ニ取りテハ誠ニ得難キ好慰安所タリ」と、收容所当局を感心させる出来映えが報告されている。その数は合計五〇あり、詳細は表の通りである。更に「備考」に「此他来迎寺將校ノ為メニ特ニ丘上ニ存セル從來ノ日本式小屋ノ使用ヲ許可セリ」とある。境内に空き地があればこの数はもっと増えたであらう。

直接住むためのものではないが、俘虜たちが協力して造った家屋がある。それは「山越の我々の教室⁵⁴」である。俘虜たちが密かに発行し続けた『陣営の火―松山俘虜收容所新聞』（正確には毎日曜日発行の週刊新聞）の最終号（一九一七年三月二五日）に、「收容所からの報告」として掲載された記事によると、「三度目の冬の終わり」に完成した「待ち焦がれていた我々自身の教室」である。テニスコートの南側と書いてあるので長建寺の境内と思われるが、縦二、七メートル、横五、三メートルの大きさを持ち、「工兵中隊の最も信頼できる香具師達が結束して手作りした」、收容所内に「これまでに造られた東屋や小屋の中で最高にすばらしく美しい」建物であった。「十五〜二〇人の生徒たちに席を提供する白くペンキを塗った部屋には、馬蹄形に整えられた机とベンチ、つややかな黒板、壁に掛かったカチカチ音を立てている時計、先生殿の机と椅子が置かれて、ことのほか親しみ深い印象を与える」建物だった。この建物はしかし簡単にできたものではなかった。大正五（一九一六）年十月初めに收容所に申請をして、許可を得るのに四ヶ月もかかっている。「そのような場合これまでいつでも当局に味あわされた経験は全然変わらなかったのだが、種々の不快な交渉のやりとりの後、一ヶ月後の十一月初めにやっとはっきりしたことは、最初の案が拒否された」ことだった。しかし俘虜は「戦いの第二部」を開始し、「外交的」交渉を粘り強く続けて「ついに完全なる成功」を大正六年一月末に獲得した。こうして三月二日に建物は完成し、五日には「三十五週時間の規則的学校」という「本当に大きい授業コース」を開始した。しかしこの一ヶ月後に彼らは徳島の鳴門に新しくできた「板東收容所」へ移ることになる。「せっかく上手に造り、心から喜んでいた建物と短い生活で別れなければならないとは誰も予想しないことだった」。

場所	小屋数
公会堂	十二
大林寺	七
来迎寺	二
弘願寺	五
長建寺	十五
不退寺	七
浄福寺	二
合計	五〇

さて、俘虜の生活は、起床七時（夏は六時）、点呼七時半（夏は六時半）、朝食八時（以下不変）、昼食十二時、夕食十八時、点呼二十時、消灯二十一時、但し日語通室は二十二時まで、将校室は二十三時まで点灯許可という「日課時限表」に基づくスケジュールで、一日が始まった。食事時間以外はほぼ自由であった。収容当初は、毎日一時間運動あるいは遊技の時間を決めていたが、俘虜たちは自ら進んで種々の運動・遊技をしたので、まもなく運動は随意になった。ドイツ兵たちのスポーツ・運動好きについては、後に見ることにして、風呂は各分置場と将校用に新しく造られていた。「週間勤務割表」によって夏は週二回、冬は一回の入浴だったが、清潔好きのドイツ人がこれでは満足できない。来迎寺の将校たちは第一日目にして、「起床ラッパが鳴るや直ちに飛び起き従卒を連れて浴室に至り、冷水摩擦を行う者もあれば冷水浴をする者もあ」ったという⁽⁵⁵⁾。中には商社員として日本で暮らしていた者もあるし、道後温泉を知っており、おまけに、松山にいたロシア兵俘虜たちがかなり自由に温泉に入ることが許された話を知っていた者もあり、外出したら一番に道後温泉に入ると待ち望んでいたが、これはついに実現することはなかった。やむを得ず、というか、工作の好きな者がいて、例えば「小水槽を吊り上げ、槽底に多数の小孔を穿ち、または如露のようにし、撒下水に浴する者」など、要するに手作りのシャワーを使った⁽⁵⁶⁾。「各種の浴法により皮膚衛生に留意する者が多かった」。十二月になっても「毎朝くみ置きの水を頭から浴びるいわゆる冷水浴や冷水摩擦を欠か

「松山俘虜収容所」に来たドイツ人兵士たち（一）



松山収容所の浴室（鳴門市ドイツ館所蔵）

さない」⁽⁵⁷⁾者もいた。

第三節 食生活・酒保等

食事は、收容当初の十一月中は便宜上請負賄いにし、三分置場それぞれ業者に料理を作らせた。一日の食費は、准士官以上は一人に付四〇銭、下士官以下三〇銭（俘虜取扱細則糧食費用標準額）であつた。しかし日本人の作る洋風の（？）料理は、残念ながら「彼等ノ嗜好及調理ノ方法ニ通曉セサル為メ到底彼等ノ嗜好ニ適シ其ノ満足ヲ期スルコト」ができなかつた。收容所の『業務報告書』にそう書いてあるし、⁽⁵⁸⁾新聞報道にも、「日本のコック君が丹精を凝らして調理した食物を俘虜ノ食膳にのほして見るとどうもお氣に召さぬ案配。彼らは絶対に冷たいものを排斥して温かいものでなくば口にしない」と不評をかつたとほやいている。大勢のものを少数で作るから冷めるのである。それより笑えないのは、新鮮なものでなければとわざわざ屠殺したての牛肉をだしたところ、牛肉は四、五日たたないと柔らかくならないし、欧州では料理しないと云つて、将校たちは全然箸をつけずに、彼らの飼っている犬と寺の犬に肉をやつてしまったという話。また、パンも焼きたてを出せば、こんなパンは下痢をすることがあると云つて食べない。食文化の違いだけではない、歴史的経験の違いの現れであろうか。日本生活の経験者もいたせいか、将校から米飯に汁に刺身がいいと注文され、それを出せば、「西洋料理よりも日本料理が旨い」と言われて、請負の炊事係はがっかりきたという。幸い、日本に三年間暮らした経験者で日本語も達者な軍人シユテツヒヤ―大尉が業者との間に立つて献立の相談をするようになって、だいぶん楽になつた。⁽⁵⁹⁾

そうした中で俘虜たちを喜ばせたのは、收容所生活が始まるのを待つていたかのように送られてきた寄贈品の数々である。十一月二十三日には早速横浜のラングフェルト商会から黒パン七箱、翌日も同商会からパン三箱、バター

一箱寄贈、同日シーメンズ・シュッケルト会社ドレンクハーン氏より金六千円の寄付。二十五日横浜のシーメンズ会社より黒パン二箱寄贈。二十九日に東京シーメンズ・シュッケルト会社ドレンクハーン氏より金千七百円の寄付が届いた。これらはすべて俘虜たちに協議の上で公平に分配した。こうした直接に届いた寄贈金品以外に、独逸救恤団や独逸赤十字社、米国大使館を経て俘虜情報局より送附された寄贈金からは、調査に基づいて俘虜の貧困者に定額を収容所閉鎖まで配分したり、また東京シーメンズ会社、神戸救恤協会、同婦人救恤団、横浜ラングフェルト商会、アーレンス商会等からの寄贈品には下着類、食料品、煙草、書籍類などもあり、中には面会のために松山に在住している独逸婦人から、毎週俘虜の希望で料理した肉類、野菜等の寄贈もあった⁽⁶⁰⁾。これらは俘虜生活を大いに支援し、日々の助けになったことであろう。

十二月一日からは炊事場の設備が完成したので、請負賄いを廃し、俘虜炊事当番による自炊になった。山越は来迎寺内に将校用とは別に、炊事場を新しく造り、炊事係は五名、大林寺炊事場は在来建物を補修し、炊事係三名、公会堂炊事場は在来建物を補修し、炊事係二名。一人一日の食費は先と変わらず、材料等は、

主 食…白パン	一人一八〇匁	一〇、三五 銭
副 食…牛肉・豚肉・生魚、精米・野菜等		一七、二〇 銭
庖厨品…コークス、薪、木炭、塩、茶、醬油		一、二〇 銭
計		二八、七五 銭

であった⁽⁶¹⁾。これを基準に、実際には収容所で作った献立表によって材料が俘虜に支給されたが、炊事係は各分置場で

好む物を作った。初日の自炊は、准士官以上は生魚の刺身に醤油をかけて喜んで食べ、下士官以下は魚をバターでフライにした。彼らの普通に好むのはカツレツやライスカレーであつたようである。⁽²⁾ 将校の食事は、准士官の献立表を基準に、将校の意見を加味して調整し、大正四年からは献立案を将校に出させて、商人に注文納入させ、同年夏からは、一週一回一、二名に衛兵を附して市井に行き、直接購買することを許可した。准士官以下については、大正五年五月以後経費節約を旨として賄額を一人一日五錢減額したが、冬期間は糧食品欠乏のため若干増額しており、収容所は状況に応じた変更を行つていったようである。

また収容所は、食材をできるだけ松山付近の生産品の使用を心がけたが、俘虜の好む馬鈴薯やタマネギは松山付近の生産が少なく、代わりに甘藷、里芋、芽赤芋、ゴボウ等を試したが、彼等の嗜好に適さず止めた。俘虜の好む豚肉も、松山付近では生産がほとんど絶無で、牛肉に比べると遥かに高いので、その使用は週に一、二回に押さえた。主食パンは白パンを使用し、初めは収容所が入札し契約購入したが、大正五年二月からは供給者が松山に製パン所を造つて製造納入になつた。大正五年九月収容所長会議後、パン自営製造を計画したが、収容所が板東へ移ることになり、実現に至らなかつた。こうした収容所の努力もさることながら、大正五年夏頃は「残飯量増加の傾向」が生じ、主食パンの量を減らすことになつた。日本の食材がドイツ人たちの口に合わなくなつたかと思いきや、理由は食べ過ぎて太つてきたせいかもしれない。公会堂に収容されていた一人に、ドイツ・ヴェルツブルク出身のヴィルヘルム・ケーバラインという二等歩兵がいた。彼が書き残した手紙や日記や写真を元に編集出版された『極東の戦争捕虜ヴェルツブルク商人ヴィルヘルム・ケーバライン』と題する本が二〇〇一年にドイツから出版されたが、彼の言葉によれば、「我々の俘虜収容所内の待遇と賄いは非常に良い。一般にすべての願望が可能な限り我々には満たされている。」「我々は米をいろんな調理で食べている、その結果私は日に日に太っている」と記されている。もちろん食生活に俘虜の

不満が無かったわけではないが、ケーバラインにとつては、「日々は味気ない退屈な中に過ぎていく」、「拘留に甘んじることは過酷な運命だ」⁽⁶³⁾と思う心の方が重要であつたろう。この過酷な運命の克服については後に見ることにしよう。

俘虜たちの日常生活が始まつて待ち望んでいたのは、必要な食品や日用品を収容所内で購入できる酒保だった。収容二日後、十一月二十二日の『海南新聞』に「いよいよ酒保も開かる」の見出しのもと、「今二十二日より山越、公会堂、大林寺の三箇所に酒保を開きしが、売りさばき品の主なるものは、スリッパ、蜜柑その他果物、手拭い、石鹸、靴下、ブラシ、紙類、齒磨、楊子、缶詰類等にして許可されし」と報道され、二十五日には、「かねて待ちに待設けおりし事とて、荷車が着するや否や先を争うて購入せし、金額二十二日分は大林寺が九円余、公会堂が三十二円二十九銭、山越五ヶ寺が二十六円にして、二十三日分は大林寺が二〇円余、公会堂が五二円余、山越各寺は僅か二時間に八十五円の巨額に達せり。最も売れ行きの良かり

ものは蜜柑、リンゴ、梨等にして、一車山積み蜜柑が長建寺一箇所にて買い占められ、将校の如き一人にて一箱百八十個入り（一個八十銭）を買い取りたるもありし。その次はタオル、齒磨き、ブラシ、紙類等なりし」と、俘虜たちの購買力のすごさに驚いている。特に山越の将校たちは現金を持っている者が多かったことによる。収容所は、販売品種は酒保委員が決めたが、差しつかえない限り許可し、値段は市中相場を標準にし、時間は通常正午から午後

「松山俘虜収容所」に來たドイツ人兵士たち（一）



松山収容所の自炊（鳴門市ドイツ館所蔵）

四時（季節により午前八時から正午）までとし、第二十二連隊出入り許可の商人のみにした。出入りの商人に対して、「逃亡幫助、秘密通信の媒介、許可していない物品の販売、風俗を乱す行為、所定価格以上の販売、同品質の低下等に關しては、絶えず監視し」た。収容所は、俘虜と民間人の接觸から問題の發生することを非常に警戒したようである。

俘虜が買い込んだ果物以上にはしなかったビールは、將校に各自一本許可されたのが十二月一日から、そして下士官以下に一週一本許可されたのは、十二月十日からである。後には一週三回一人一本を買うことが許可された。アルコールはビールに限られていたが、特別の計らいが無かつたわけではない。「彼らの祝祭日等に際してその飲用許可を願ひ出たときは、特にブランドー、葡萄酒等数種の洋酒若干を飲用させた」⁽⁶⁴⁾。例えば大正三年のクリスマスには、前もつてクリスマス用に神戸や横浜等へ多数のブランドーやウイスキーの注文をできたし、また各地から寄贈されたブランドーやウイスキーも、全部各収容所に配分された。二十四日の夜はビール一人一本の制限をのけるよう申し入れ、下士官の中に私費購入できない者のいることを考えて、毎日の食費から一本を補填することで、一人一本が許可された。さらには、山越収容所の現役兵二百名が所持金をもっていないのを同情し、公会堂の三名が二十五日にビール四箱を寄贈したとも報じられている⁽⁶⁵⁾。もちろん飲み物の手配ばかりではない。クリスマスの準備に、來迎寺の將校たちは下士官の工兵たちを呼んで、間取りの変更、祭壇の設置、供物台造りに裝飾を行い、公会堂や大林寺でも、玄關の前に大きな松の木を立て、その枝にローソクを灯した。長建寺では本堂をきれいに掃除し、堂の真ん中に祭壇を設け、天井には赤青黄紫金銀等の色紙で作られた輪違いのモールを一面に飾り、左右の柱には大きい松の木を立て、周囲の机の上には和尚の手で山から切ってきた松の小枝をいっぱい敷き詰め、その上にフォークやスプーン、皿を置いて、皿には横浜から取り寄せたクルミやアナナス、菓子類を盛っている。將校たちの当日の料理は鶏一羽、鯉一匹、車エビ十五匹、卵、林檎等々と豪華なもの。將校たちは当日午後一時から來迎寺において、前川所長以下所員全部及び監

督將校並びに吉川住職を招待して饗応し、夕方から將校たちは部下の居る分置場へ手分けして出かけた。公会堂が一番盛大で、飲む、食う、踊る、舞うのドンチャン騒ぎ、長建寺でも蓄音機を奏して歌い踊り、二日間は何灯も十二時に延ばされた。〔海南新聞〕大正三年十二月二十五、二十六日

「彼等の祝祭日等」の中で忘れてはならない日に、ドイツ皇帝誕生日（一月二十七日）がある。大正四年一月二十七日のこの日は早朝から各分置場で祝賀式を行い、昼の行事の後、夕方から「祝賀の宴」を張った。一番にぎやかだったのは来迎寺の將校たちで、次は公会堂、大林寺、長建寺の順。中でも寡黙で変人めいた理学博士ゾルガー少尉が一番の酒豪で、次がシュテツヒャー大尉だが、二人共酔いつぶれて翌日中死人のごとく寝どうしだった、と報道〔海南新聞〕大正四年二月十日）されているから、この日の酒宴の程はクリスマス以上かもしれない。昼の行事については、ドイツ的文化活動の章に譲ることにしよう。

ここでの最後は、日本的文化の正月について、エピソードを一つ述べておきたい。クリスマスに飾った松飾りがまだそのままの内に正月の準備が始まった。松山収容所当局は俘虜に対する正月の献立をあれこれ協議し、その結果結局日本通りの献立をすることにまとまった。即ち、大晦日は運蕎麦にかまぼことネギを添える。元旦は餅を三個雑煮に入れ、中には豆腐、人参、牛蒡、煮乾等を入れ、醤油味にする。餅二個は焼いて食べさせる。更に吊し柿五個に落花生一袋、それに一升七十銭の日本酒一人一合。二日、三日も同様に雑煮餅を食べさせるという三が日の予定にした。⁽⁶⁶⁾ 収容所としては、日本料理による精々のもてなしと考えたのであろう。三十一日がくると、収容所附き神傘主計が各分置場を回って雑煮の煮方を俘虜炊事当番に教えて、元旦にはなんとか雑煮ができた。ところが、いざ口に入れると、俘虜たちは餅が口に粘り着いてうまく食えないと諦めて投げ出してしまった。今でもドイツ人にうどんの苦手が多い。口の中でのあのねっちょりがだめなのである。元旦に振る舞った数の子、田作、油揚、芽赤芋、十六まめの

きんとん、焼き魚、串柿三個、焼き餅二個、落花生一袋、ジャム等の折り詰めは、公会堂はほとんど残飯、山越はきれいに食べたが焼き餅だけは口にへばりつくからだめと食わず、大林寺は折り詰めも餅もだめだった。大晦日の蕎麦だけはどこも珍しがって喜んで食べたということであった。⁽⁹⁾二日からの食事はどうしたのであるうか。ドイツは今でも大晦日をジルベスターといって、午前零時には花火を上げて新年を祝い、深夜おそくまで飲んだり踊ったりのお祭りだが、二日からは普段の生活である。収容所の新しい一年の始まりであった。(以下次号)

注

- (1) 「俘虜」の字は現代的には「捕虜」の字を用いるが、第二次世界大戦まで公用語ではすべて「俘虜」に統一されていたので、ここでもすべて「俘虜」を使用する。
- (2) 松山大学『マツヤマの記憶―日露戦争一〇〇年とロシア兵捕虜』成文社二〇〇四年、五〇頁。(以下『マツヤマの記憶』と略記)
- (3) 同書、三八―四〇頁。
- (4) 同書、五〇頁。
- (5) 松山収容所編『松山収容露国俘虜』松山俘虜収容所、一九〇六年。
- (6) 才神時雄『松山収容所―捕虜と日本人』中央新書一九五、昭和四四年、十一頁。
- (7) 同書、十二頁。
- (8) マツヤマの記憶』五一頁。
- (9) 同書、四九―五〇頁参照。
- (10) 同書、資料一「マツヤマロシア人墓地・墓碑配置図」二一九―二一七頁参照。
- (11) 同書、四五―六頁。

(12) ラウエンシュタインの正式階級は「海兵第三大隊第六中隊予備補充兵」である。才神時雄、同書、百十八頁。

(13) 加藤陽子『戦争の日本近現代史』講談社現代新書、二〇〇二年、一七〇頁。

(14) 上海発一九一四年八月一日発令「中国及び日本に居住する兵役適合ドイツ人は全員青島に招集」(『Japan Chronicle』号外、一九一四年八月二日付、神戸)及び神戸のドイツ領事からの公示「予備役、補充兵及び後備兵は全員最短にて青島に集結すべし」に應じ、神戸にいた該当のドイツ人たちは八月四日には神戸駅から、家族や大勢の日本人に見送られて(中にはイギリス人の姿もあった)、青島へ出兵した。神戸のドイツ商會に勤めていた一九歳の若者ハインツ・ファン・デア・ラーンはまだ兵役検査を受けていなかったが、領事の許可を得て決意し、八月八日に神戸から船で上海へ、そこから汽車に乗り、済南で山東鉄道に乗り換え、青島には十四日夕刻に着いている。ラーンは松山収容所に来る四一五人の一人である。以上は彼の残した手記「青島の回想一九一四年東アジア戦争―ドイツ志願兵の体験」による。(Heinz van der Laan: Erinnerungen an Tsingtau. Die Erlebnisse eines deutschen Freiwilligen aus dem Krieg in Ostasien 1914. Hrsg.v. Rolf-Harald Wippich OAG Taschenbuch Nr.75 1999, S.23 - 28.)

(15) 瀬戸武彦『青島から来た兵士たち―第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』同学社、二〇〇六年、六一―六二、七五頁参照。

(16) 防衛省防衛研究所図書館所蔵文書。

(17) 『青島戦記』朝日新聞合資会社、一九一五年、一八六―七頁。

(18) 同書、一八五、一八七頁。

(19) JACAR (アジア歴史資料センター) 防衛省防衛研究所 RefC0302440900。上記陸軍省の「俘虜収容所設置の件」文書には、陸軍省告示第一九号「十二月三日俘虜収容所ヲ静岡、徳島、大分ニ設置ス」も含まれている。

(20) 『海南新聞』大正三年十一月十二日。

(21) 『日誌』(松山俘虜収容所 大正三年十一月起大正四年七月迄) 大正三年十一月十一日。なお柿沢軍医、高田・五百木両軍曹の三人は十五日に広島第五師団演習地から帰り事務に着手と記されている。

(22) 『大正三・四年戦役松山俘虜収容所業務報告書』(大正六年四月二十三日)「第一章 開設」の冒頭に、「大正三年十一月十一日夜半第五師団機動演習地ニ於テ松山俘虜収容所開設ニ関スル命令ヲ受領シ急遽松山ニ帰還シ、大正三年十一月十三日松山俘虜収容所本部ヲ歩兵第

「松山俘虜収容所」に来たドイツ人兵士たち (一)

二十二連隊本部内ニ開設ス」と記されている。(以後『業務報告書』と略記)。

(23) 『海南新聞』 大正三年十一月十二、十三日

(24) 『海南新聞』 大正三年十一月十三日。ここには山越の弘願寺が入っていない。

(25) 防衛省防衛研究所図書館所蔵。

(26) 収容所本部は大正四年一月十三日、大林寺に移転された。〔従来収容所本部ハ歩兵第二十二連隊本部内ニ在テ執務中ノ処各収容所ト遠隔シ且ツ狹隘ニシテ執務上不便尠ナカラザルニ付大林寺内移転ス〕(『日誌』 大正四年一月十三日)

(27) 『日誌』 参照。

(28) 以下の時刻は『日誌』に基づく。新聞の報道とは異なっている。

(29) 『海南新聞』 大正三年十一月十九日

(30) 才神時雄、同書、一三八頁。

(31) 『海南新聞』 大正三年十一月二十一日。

(32) 同右。

(33) 『業務報告書』「第二章収容」。

(34) 同右。その後に補足文がある。「高浜ニ於テ第一八師団引率將校ヨリ受領当時ノ隊号ニヨリ右ノ如ク区分セシモ、其ノ後調査セシ隊号ハ複雑ニシテ右ノ如キ簡單ナルモノニアラザルモ、時ヲ經過シ同一分置場停虜相互親睦トナリ特ニ入レ換フルノ必要ヲ認メサリシヲ以テ最後迄其俣トナセリ」

(35) 『マツヤマの記憶』 十二頁。才神時雄、同書によれば、「収容地の先鞭をつけた松山では、幼稚園、小学校の運動会、中学校のボートレース、水泳、女学校、師範学校の授業参観、武徳殿での剣道、薙刀の試合の観覧、大相撲、芝居の見物、名所桂景の地の散策、はては、東京、九州への県外旅行まで許されたのであった」。(六一頁)

(36) この「陸戦ノ法規慣例ニ関スル規則」は、一九〇七年十月十八日に「調印」した後、一九一一年十一月六日に「批准」し、一九二二年一月十三日に「公布」している。(『取扱顛末』「付録・第一」)

- (37) 『大正三年乃至九年戦役俘虜ニ関スル書類』に納められている「陸戦ノ法規慣例ニ関スル条約抜粹」及び「俘虜取扱規則」を参照。
- (38) 『日誌』大正三年十一月十四〜十七日。
- (39) 第二〇条に対する具体的な指示としては、「俘虜収容所ノ廠舎トシテ当初ハ成ルヘク在来ノ建築物ヲ以テ之ニ充用セントスル方針ニ基キ
(…) 其ノ建物ノ種類ハ主トシテ寺院及地方官公署所属シテ・・・」(『取扱顚末』の「第二節収容及待遇」) いることであつた。
- (40) 『マツヤマの記憶』二五頁。
- (41) 宮脇昇『ロシア捕虜の歩いたマツヤマ』愛媛新聞社、二〇〇四年、二六三頁以下。
- (42) 『愛媛新報』大正三年十一月十九日。
- (43) 宮脇昇、同書、二六二頁。
- (44) 『海南新聞』大正三年十一月二十八日。
- (45) 『業務報告書』「第五章、五建築物及附属物」、「第九章 将来ニ関スル意見」より。
- (46) 富田弘『ドレンクハーン報告書―日独戦争と在日ドイツ俘虜―豊橋技術科学大学：人文社会工学系紀要雲雀野第三号、一九八一年、二九頁。
- (47) 東京(習志野)、静岡、名古屋、大阪、姫路(青野原)、徳島、丸亀、松山、大分、福岡、久留米、熊本の十二収容所。
- (48) 富田弘『ドレンクハーン報告書』、三九〜四三頁参照。
- (49) 習志野、静岡、名古屋、大阪、青野原、徳島、丸亀、松山、大分、福岡、久留米の十一箇所。熊本は一九一五(大正四)年六月九日に閉鎖し、久留米に移転した。
- (50) 高橋輝和『サムナー・ウェルズによるドイツ兵収容所調査報告書』(『青島戦ドイツ兵俘虜収容所』研究会編『青島戦ドイツ兵俘虜収容所』研究創刊号、二〇〇三年) 一六〜一八頁参照。以下の引用箇所も同じ。
- (51) 『業務報告書』「第二章 収容」
- (52) 『業務報告書』「第九章 将来ニ関スル意見」より。
- (53) 『海南新聞』大正三年十一月二十五日。
- (54) "Lagerfeuer-Wöchentliche Blätter für die deutschen Kriegsgefangenen in Matsuyama" II, Jg. Lf. No. 12/13, Matsuyama, Sonntag, den

「松山俘虜収容所」に來たドイツ人兵士たち (一)

25 März 1917.『陣営の火―松山俘虜収容所新聞』第二卷十二・十三号、一九一七年三月二五日）なお『陣営の火』の訳語は、富田弘『板東俘虜収容所』（富田弘先生遺著刊行会編、一九九一年）に従っている。

- (55) 『海南新聞』大正三年十一月二十二日。
- (56) 『業務報告書』「第五章 衛生」
- (57) 『海南新聞』大正三年十二月十日。
- (58) 『業務報告書』「第四章 給與」
- (59) 『海南新聞』大正三年十一月二十七日。
- (60) 『業務報告書』「第三章 取締及警戒、十二寄贈金品」
- (61) 『業務報告書』「第四章 給與」
- (62) 『海南新聞』大正三年十二月三日。
- (63) Andreas Mettenleiter : Gefangenen in Fernost. Sechs Jahre im Leben des Würzburger Kaufmanns Wilhelm Köberlein. Echter Verlag, Würzburg, 2001. S. 40 – 41.
- (64) 『業務報告書』「第四章給與」
- (65) 『海南新聞』大正三年十二月二十七日。
- (66) 『愛媛新報』大正三年十二月三十日。
- (67) 『愛媛新報』大正四年一月三日。